



一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

admin@nipponbolivia.org

042-673-3133



日本ボリビア協会会報誌

カントウータ Cantuta No.23

目 次

1. 長期安定政権に向かうモラレス政権 遅野井 茂雄
2. フォルクローレという音楽 木下 尊惇
3. La historia del carnaval: de orgía a patrimonio
Mine KOJIMA
4. ボリビアを歩いて：1970年中盤のラ・パス市 . . . 高野 潤
5. 日本語教室奮戦記：ボリビア、コチャバンバにて . 佐藤 葉
6. 日本での研究と日常生活について 池田アレックス潤平

一般社団法人 日本ボリビア協会
平成 27 年 3 月 31 日発行

1 長期安定政権に向かうモラレス政権

筑波大学大学院教授
日本ボリビア協会理事
遅野井茂雄

はじめに

良好な外部環境と顕著な社会経済実績の下で、モラレス政権は、5年前の大統領選挙と同じく、6割を超す圧倒的な支持を集めて勝利し、議会でも両院で3分の2の絶対多数の議席を確保して、2015年1月第3期政権（～2020）を発足させた。

1月22日の就任式の議会演説でモラレス大統領は、2006年以降の政権が成し遂げた成果を、数字を挙げて誇示することに1時間に満たない演説のほとんどを費やした。次期政権の目標としては司法改革（国民投票の実施）、極貧人口（18%）の一桁台への減少（8～9%）の他は、チリに対する海への出口問題の要求などにふれたのみで、政権発足の演説としては異例の内容となった。

まさに向かうところ敵無し、余裕の演説ともいえるが、政権発足以来これまでの僥倖とも言える恵まれた外部環境は急速に変化している。原油価格の急速な下落にともなう天然ガスの価格の低下等、輸出資源価格の低迷、また ALBA（ボリバル同盟）の旗の下で政権発足以来の盟友関係にあったチャベス大統領死去後のベネズエラ危機の深刻化、キューバ政府と米国との電撃的な正常化交渉の開始など、良好な外部環境は大きく崩れ始めている。

これに南米南部において先住民・社会運動主体のモラレス政権を支えてきたブラジルの労働党（PT）ルセフ政権とアルゼンチンのフェルナデス・キルチネル政権の弱体化が加わる。まさに21世紀に入り、資源価格の急騰を背景に確立した左派政権の台頭という中南米の国際関係の構図に大きな変化が生れている（チャベス大統領死去後のモラレス政権の行方については、拙稿「チャベス後のボリビア・モラレス政権—長期政権化への道」『ラテンアメリカレポート』30—2、2013年12月、参照）。さらに先住民基金をめぐる汚職の疑惑が浮

上するなど、支持基盤内部での緩みも垣間見える。

もともと、モラレス政権は、これまでの良好な外部環境を背景に慎重なマクロ経済運営の下で蓄積された堅固な財政の基盤と、GDPの45%に達する史上希にみる積み上がった外貨準備高がある。当面、景気刺激策をとり、目標の5%の成長率を達成することは可能である。ボリビア現代史上最強の政権であることは変わりなく、目指す独立200年に当たる2025年までの長期政権への道のりに、さしあたり大きな障害は見当たらない。

小稿では2回の選挙結果を総括し、モラレス政権の今後の展望にふれたい。

1 与党の圧勝続く大統領選（2009年/2014年）

今回の選挙も予想通り与党 MAS の圧勝となったが、野党としてドリア・メディナの存在が増大している。左派や先住民勢力の中に MAS の代替勢力は今回も現れなかった（表1）。与党との連携を断って10年の地方選挙で躍進した MSM（恐れを知らない運動）は得票率3%を満たすことができず、緑の党（PVB）とともに、政党登録を抹消され、党首デルグラナド元ラパス市長は政界引退となった。この結果、議会も2期続けて与党が3分の2を制覇する結果となった（表2）。

表1 大統領選挙の結果

2009	(%)
MAS : エボ・モラレス	(64.22)
PPB-C : マンフレド	(26.46)
UN : ドリア・メディナ	(5.65)
AS : レネ・ホアキノ	(2.31)
2014	
MAS: エボ・モラレス	61.36
UD: ドリア・メディナ	24.23
PDC: キログ	9.04
MSM: デルグラナド	2.71
PVB-IEP: バルガス	2.65

(CNE)

表2 議会選挙の結果

	2009		2014	
	上院 (36)	下院 (130)	上院 (36)	下院 (130)
MAS	26	88	MAS	25
PPB	10	37	UD	9
UN	0	3	PDC	2
AS	0	2		10

(CNE)

2 東部への MAS 支持の浸透

前回 2009 年の選挙で「半月地域はもはや存在せず」としたガルシア・リネラ副大統領の発言は、今回さらに重みを増している。前回選挙では東部 3 県で MAS は敗れたが、今回 14 年選挙では、サンタクルスをも制し、ベニで敗北したのみであった。

表3 大統領選挙：MAS の県別得票率 (%)

県	2005	2009	2014	
			得票率 (%)	得票率 (%)
チュキサカ	54.17	56.05	63.38	
ラパス	66.63	80.28	68.92	
コチャバンバ	64.84	68.82	66.67	
オルロ	62.58	79.46	66.42	
ポトシ	57.80	78.32	69.49	UD
タリハ	31.55	51.09	51.68	(26.59)
サンタクルス	33.17	40.91	48.99	(39.82)
ベニ	16.50	37.66	41.49	(51.44)
パンド	20.86	44.51	52.09	(40.95)
東部:半月地域			(CNE)	

3 圧勝の要因

(1) 圧勝の要因はまず、野党・反対派が、候補者の一本化に失敗し、新憲法を制定した全国政党としての与党の立場に替る勢力となり得なかったことである。TIPNIS の道路建設問題等での批判があり一部支持勢力は離反したが、有力な先住民代替候補は今回も登場しなかった。そもそも反 MAS の先住民系と東部の利害は錯綜・対立しており、調整は不可能であった。

(2) 次に最強の政府、政権党の強みである。中南米全体が 2014 年、景気低迷 (平均 1.1%) にみまわれる中でボリビアは 5% 平均の高い成長率を維持した (長期マクロ経済指標は巻末表 4)。

左派政権には、82~85 年の政権担当時にハイパーインフレを惹き起こし、その後長期間、左派の凋落を招いた苦い記憶がある。盟友のベネズエラのチャベス体制とは対象的な健全なマクロ経済運営は IMF も評価するところだ。財政の黒字、資源収益の蓄積は危機において公共投資と内需の拡大策を可能にしている。国有化収益を原資とする地方自治体への分配や、社会プログラム (3 種の直接給付: ・児童生徒を対象とする条件付給付 (Bono Juancito Pinto)、60 歳以上の全国民を対象とする非拠出型生涯年金 (Renta Dignidad)、社会保険のない妊産婦等を対象とした条件付給付 (Bono Juana Azurduy)) が奏功し、貧困人口の大幅減少、非識字率の減少など社会政策において成果をあげた。

(3) 次に、アイデンティティの次元で先住民・社会勢力と政府との一体感が確認されている点である。社会政策が国有化によって達成されたという成果を前面に出し、新自由主義批判等、2005 年選挙の争点はいまだ有効に機能している。政治運営に批判はあるにせよ、先住民・社会勢力にとって MAS 政権が現実的な選択肢であることに変わりはない。

(4) 4 点目は、先住民性を強調することを控え、中核的な支持勢力にとどまらず、中間層、東部へと広範な支持の浸透を意識的に図り、左派から中道右派、中間層に支持を拡大してきたことである。対立状況は薄まっている。新自由主義として批判され政府から離れたテクノクラートも政権に戻りつつある。憲法の規定を文字通り厳格に施行せず、東部経済界に安心感を与えてきた点も大きい。東部の切り崩しに奏功するとともに、農業輸出業者もまた市場確保に政府依存を高めている。

4 統一地方選挙 (2015 年) へ向けて

与党は先の 2010 年の地方選挙で、6 県知事選で勝利したが、東部のサンタクルス、タリハ、ベニでは反対派知事が再選された。地方自治体の 3 分の 2 は MAS が制覇したものの、県庁所在地など主

要 10 市のうち 7 市で与党は野党候補に敗れている。都市部の批判票が野党・反対派に集まった形である。とくに与党連合を解消した MSM（恐れなき運動）が第 2 党に躍進した。

3 月 29 日の 2015 年統一地方選挙で、与党にとって東部、都市部の首長の制覇が目標となった。速報によれば、与党は 329 の地方自治体のうち圧倒的な強さを見せ、8 割以上で勝利したものの、県庁所在地の 8 市（ラパス、コチャバンバ、サンタクルス、オルロ、タリハ等）に加え、エルアルトでも敗れたほか、ラパス、サンタクルス、タリハの県知事選でも野党候補に敗れる結果となった。汚職等の影響で都市部での批判票が増えたものとみられる。

5 長期政権化への展望

モラレス政権は、史上まれにみる良好な対外環境と高い社会経済実績に支えられ、かつてなく磁力をもつ強力な政権となった。政権発足以来のアルセ経済相の下での慎重なマクロ経済運営が続き、潤沢な財政に支えられ、外貨準備高は 14 年 GDP 比 45% (150 億ドル) に上る。モノカルチャー経済の脆弱性というこれまでの歴史経験に基づき、来るべき国際経済の変化と資源価格の低下に対し準備をしてきた政権といっても過言ではない。財政の天然ガスへの依存度 (30%)、輸出の資源依存度 (90%) は高まっており、資源価格の低下、天然ガスの輸出収益の減少 (15 年は 25% 減を予想) は財政にも影響を与えると見込まれるが、5% 成長を維持する財政基盤は強いものがある。

だが中長期的に、国際価格と対外需要に依拠した天然ガスと鉱山に傾斜した資源依存の経済からいかに脱するかが課題であるが、目指す一次産品輸出経済からの転換は具体策に乏しい。雇用と所得に連動した内発的開発にどう進めるか。輸出の多角化や資源の産業化も、資源ナショナリズムや「共同体主義的社会主義」の言説と投資環境の間に大きな溝がある。リチウム開発をめぐるにはもはや機会を逸したとは言えないか。

政府は 13 年 1 月に 2025 年の独立 200 周年に向けた改革アジェンダ「祖国の課題（尊厳と主権をもつボリビア 13 の柱）」を公表した。目標として、①極貧層の根絶、②基本サービスの供与、③保健、教育、スポーツ振興、④科学技術の主権、⑤共同体主義に立つ金融制度、⑥多様化した生産、⑦天然資源の国有化、産業化、流通、⑧食糧の主権、⑨環境と統合的開発、⑩諸民族との統合・補完、⑪透明性をもつ公行政（盗まない、嘘をつかない、怠けない）、⑫文化新興・自然の歓び、⑬海、繁栄との再会を挙げている。一人当たりの所得が 1000 ドルから 3000 ドルに迫る段階に達したとしても、10 年間での目標達成のハードルは高いものがあると看做されるを得ない。

国際的な良好な環境をいかに築いていけるかも課題である。ベネズエラ情勢の急変はもはや時間の問題とみられ、ラパス=カラカス=ハバナ軸は、以前のように機能しなくなるであろう。それに経済低迷と石油公社の汚職問題に揺れる 2 期目ルセフ政権のブラジル情勢、イラン政府との密約の疑惑をめぐってのアルゼンチンの政治危機がある。先住民政権を庇護してきた南部両国の左派政権の弱体化は、輸出額の半分を占めるガス輸出の市場でもあるだけに、動向しだいではモラレス政権の国際的な孤立が強まる可能性がある。静止衛星など中国の援助も問題を秘めている。

今後政府は、連続 3 選を禁止している現行憲法を改正して 2025 年までの長期政権化への始動を開始することになるが、前途は必ずしも安泰とは言えない。もはや国有化や新憲法制定のような目玉となる政策の選択肢が残されてはいない。その中で、政権には中核の支持勢力を抑えつつ、多様な勢力との調整を図りながら、恵まれた条件を活かし、行政能力の向上など実質的な政策を進めることが求められるであろう。米国との関係改善をはじめ、どこまでプラグマティズムに立った政策運営ができるかにかかっている。

※巻末表 4 ボリビア主要経済指標参照

2 フォルクローレという音楽

フォルクロリスタ 木下尊惇

「フォルクローレってどんな音楽ですか？」立场上、しばしばこういう質問に遭遇する。この問いに正確に答えようとすると、話の内容は、地理的、歴史的、社会的、音楽的に広がり、とても立ち話では済まなくなる。「アンデスやアマゾンに暮らす人たちの、生活の中から生まれた音楽が基になっているのですよ。」これが今の私に即答できる、フォルクローレの要旨である。長い長い時の流れの中で育まれて来たさまざまな文化的要素…楽器、形式（スタイル）、言葉（詩や物語）などの複合体が、地域性をもった暮らしに基づく動作によって奏でられ、歌われるのが、本来の民俗音楽の姿、フォルクローレの響きである。

ボリビアでは、フォルクローレという独立した音楽ジャンルは存在しない。あくまでも *música moderna*（モダンな音楽／ジャズ、ロック、ポップスなど）に対しての *música folklórica*（フォルクローレ音楽／伝承的な音楽）という意味合いで使われる。フォルクローレ音楽は世界各地に存在するし、実際に「日本のフォルクローレを聞かせて」と言われる事も多い。ちなみにボリビアで、特にボリビアの伝承的な音楽を指す時には、*música nacional*（我が国の音楽）という言葉が使われる。ここには『伝承的な』という意味も込められている。しかし事情の分かっている者同士の会話では、*folklor*（フォルクローレ）という言葉で、日本のいわゆる『フォルクローレ』と指す事も多くなった。普段は私も『フォルクローレ』という言葉、幅広く使う事にしている。

「最近の若者たちはフォルクローレを好まない。フォルクローレを知らない。」という話を、私と同世代のボリビアの友人たちからよく聞くようになった。これはどういうことなのか？

私がラパスに暮らしていた80年代から90年代にかけてのボリビア音楽業界では、フォルクローレ音楽がとても大きなシェアを持っていた。ボリビア各地には、それぞれに特徴を持った人気コン

フント（グループ）が活躍し、彼らが出演するペーニャ（ライブハウス）がいくつもあった。テレビにもラジオにもフォルクローレ番組があり、公開放送の会場は、いつも聴衆の熱気であふれていた。私たちのコンフント（ルス・デル・アンデ）も、一晩にいくつもの演奏を掛け持ちしていた時代である。

4年程前にラパスで、ルス・デル・アンデのコンサートをしたあとに、コンフントのファンでもある友人と会食した。「コンサート、とっても良かったわ。“私の時代の音楽”がたくさん聞けたし。」『私の時代の音楽～*música de mi época*』とても象徴的な表現である。

ボリビアで暮らしていると *mi época*（私の時代）という言葉、よく耳にする。恋をしたり、社会の矛盾と戦ったり、悲しみや喜びをストレートに表現した時代。月並みな表現ではあるが『青春を謳歌した時代』というニュアンスである。『青春を謳歌した時代の音楽』は、『良き思い出とともにある音楽』なのだ。良き思い出の時代にフォルクローレのブームが重なれば、当時流行っていたフォルクローレの数々が *música de mi época* となる。

世代によって *mi época* の時期は異なる。『私の時代』に歌ったり踊ったりしたフォルクローレが、『私の時代のフォルクローレ』なのだ。私たちより一世代前の人たちにとってのフォルクローレは、ヒルベルト・ローハスのタキラリであり、クエッカであり、ワイニョである。

ヒルベルト・ローハス（Girberto Rojas／1916～83）は、ボリビアのフォルクローレを『ポピュラー音楽』に仕立て上げた立役者のひとりである。ボリビア各地の音楽形式、リズム様式を駆使して、数多くのヒット曲（流行歌）を世に出した。また今も愛唱されるボリビア各地のご当地ソングも、その多くが彼の手によるものである。文化的に大きく異なるボリビア各地の音楽を、『ボリビアのフォルクローレ』の名の下にまとめあげたのも、ヒルベルトと、その時代に活躍した音楽家たちである。

ヒルベルトが最も盛んに活動した時代のボリビア音楽の演奏は、小編成のオーケストラか、いわゆるバンド・スタイルがほとんどで、たいていそこに歌が重なっていた。当時（40年～50年代）録音されたレコード（SP盤）を聞いてみると、ケーナやシーク（サンポーニャ）といった、いわばフォルクローレ・ユニットの花形的楽器が全く使われていない。ギターやピアノに、オルガン、アコーディオン、コンセルティーナ（手風琴）もしくはブラス系の金管楽器に、打楽器である。

ボリビアでは1953年に農地改革（Reforma Agraria）が行なわれるまで、農村と都市の生活は、はっきりと分けられていた。町に住む人たちが、農村の音楽や楽器（ケーナやシーク）を直接的に楽しむ事もなかったのである。ちなみにチャランゴは、ずいぶん古い録音にも登場する。ヨーロッパに起源を持つこの楽器は、『町の楽器』として楽しまれて来たのであろう。

『私の時代の音楽』というの、都市部に暮らす人たちの言葉である。自分の人生を軸に、世相を重ね合わせた記憶である。農村部の人たちが音楽を話題にするときには、『私の村の音楽～música de mi pueblo』か『季節の音楽～música del tiempo』となる。『季節の音楽』とは、例えばラパス周辺の農村部で、カルナバルの時期に演奏されるタルケアードであったり、乾期の祭りで演奏されるシクーリであったり、季節のイベントや祭礼に付随した音楽である。

農業を中心とした農村での生活は、土地や気候と直接的に繋がっている。自然によって生かされていることを、直に感じられる暮らしなのである。土地(mi pueblo)の力を借りながら、地球が回り、季節が巡ること(tiempo)を実感しながら、自分もその一部として循環する日々の中に、農村の音楽は存在するのだ。

私が長く暮らしたラパスの下町チヒニ地区では、町の中でありながら、時の巡りの繰り返しを、日常的に感じる事ができる。朝暗いうちから、メルカードで売られる農作物が運ばれて来て、町が

明るくなる頃には、市場の賑わいが最高潮になる。昼休みのまったりとした時間を経て、夕暮れときにはみんな荷物を片付ける。売れ残った作物などが、毎日同じ場所に積み上げられ、すっかり暗くなった時刻には、生活に困窮した人たちが、売れ残りの山から、生きる糧を探し当てにくる。夜も更けた頃、今度は犬たちがそこそこで、収穫物の臭いをかぎ回る。そして夜明け前の搬入を前に、町の清掃係の人たちが、辺りをきれいに掃除するのだ。

ここ数年のボリビアでは、モレナーダが流行っているという。都市部のフィエスタではモレナーダが盛んに踊られ、演奏家のあいだでも「モレナーダのヒット曲を出せば、そのグループはしばらく安泰だ」とも言われる。

モレナーダは、ティティカカ湖周辺の農村部で発生したといわれる伝統的な舞踊形式である。カルナバルや各地の祭りで踊られるようになり、いつしかディアブラダと共に、アンデス舞踊の花形的な存在となった。流行っているのはモレナーダだけではなさそうだ。時折資料として閲覧するYouTubeには、クジャワードやジャメラダ、カジャワヤなどアンデス舞踊の数々が、若者たちのグループによって踊られる様子がアップされている。後ろで流れているちょっとポップなフォルクローレを演奏しているのも、今風の若者たちである。「最近の若者たちはフォルクローレ好き？」

現代社会での流行は、恣意的に作られるものがほとんどである。そしてその目的は商業的成功である。ボリビアのフォルクローレもポピュラー音楽として商業的な役割が確立されてから、その方向で大いに発展してきた。多くの音楽家、演奏家たちが『私の時代の音楽』の担い手になろうと、努力をして来たのである。しかし商業的が度を過ぎれば、繊細さや奥ゆかしさはなくなり、奥行きにも広がりにも欠くものにならざるを得ない。そこには日々の暮らしの力強さも、心地よさも、誠実さも存在し得ないのだ。

80年代に、サガルナガ通りの露天に堆く積み上

げられていた手織りのアワイヨが、今ではほとんど見られなくなってしまったように、本来の姿のフォルクローレが枯渇してしまう危険性は、十分に想像できる事だ。ボリビアのフォルクローレに限られた事ではないが、商業的音楽文化は大きな岐路に立たされている。

祭りが近くなると、チビニ地区のあちこちでバンダ(ブラスバンド)の音が聞こえるようになる。バンダの奏でるモレナーダは、とても力強い響きがある。大地に両足を踏ん張った音は、建物の狭間を抜けて、ラパスの空いっぱいこだまする。



3 La historia del carnaval : de orgía a patrimonio

Doctora en Ciencias Humanas (antropóloga)

慶応義塾大学非常勤講師

Mine KOJIMA 児島 峰

Es para mí un honor tener la oportunidad de colaborar en la revista *Cantuta* de la Asociación Nippon-Bolivia.

He trabajado más de diez años en Bolivia como antropóloga, con una investigación especializada en el Carnaval de Oruro, la que me permitió obtener el título de Doctora y posteriormente publicar el libro académico titulado “La festividad de la ciudad andina: investigación interdisciplinaria sobre el Caraval de

Oruro” (ISBN978-4-7503-3947-4) por la promoción de “grants-in-Aid for Scientific Reseach” en 2014.

En esta ocasión quisiera contribuir a la comprensión de “la historia del carnaval”.

1. Carnavales en el mundo

El Carnaval se basa en el calendario cristiano y se ejecuta antes de la Cuaresma, en la que se obliga la abstinencia de carne y de placer sometiendo el ejemplo de ayuno de cuarenta días que hizo Cristo en el desierto, según nos cuenta la biblia. El Carnaval es el período de regocijo, abundancia de carne y de celebraciones hasta orgía antes de la solemnidad que exige la Cuaresma. La fecha del Carnaval varía, dependiendo de la fecha de Pascua, normalmente cae entre febrero y marzo, y en los tiempos pasados comenzaba desde la Navidad, o del día de los Reyes Magos, el 6 de enero, hasta el Miércoles de Ceniza, el primer día de la Cuaresma. Hoy en día, en muchos países y regiones se toma como fecha del Carnaval los tres días anteriores al Miércoles de Ceniza.



Obviamente el Carnaval fue

introducido en Latinoamérica con la Conquista, la llegada de los españoles.

Cuando se habla de carnavales, podemos referir inmediatamente a los de Rio de Janeiro, de Brasil, con el ritmo excitante de samba, o el de Venecia, de Italia, con máscaras y disfraces de tipo medieval. Entre tantos, el Carnaval de Oruro, de Bolivia, fue el primer carnaval declarado como “Obra Maestra del Patrimonio Oral e Intangible de la Humanidad” por la UNESCO, en 2001, también fue proclamado e integrado como “Patrimonio Cultural Inmaterial de la Humanidad”, en 2003, cuando fue ratificada por 30 estados miembros como había previsto la convención. Hasta la fecha, los carnavales de Barranquilla, de Colombia (2003), de Binche (2003) y de Aalst (2010) de Bélgica también están denominados como Patrimonios Culturales Inmateriales, además hay otros Patrimonios relacionados con el carnaval.

Parece extraño que el festejo de carácter orgiástico como el Carnaval, se considere “obra maestra” o “patrimonio”. Para comprender la razón sería útil conocer la evolución del carnaval en América Latina.

2. El Carnaval en la historia

Los estudios nos muestran que tanto en Europa como en Latinoamérica los carnavales tienden a tener elementos violentos o rebeldes. Por lo tanto las autoridades quisieron prohibirlos y en muchos casos sus esfuerzos dieron resultados.

En el caso de Latinoamérica hay otro factor perjudicante para el carnaval, ya que los festejos del mismo parecían obstáculos de la meta de la Nación a los gobiernos que deseaban establecer una nación “moderna”, pues el carnaval fue aprovechado para expresar la propia cultura y la fe de quienes tenían que fingir como “buen cristiano” en la vida cotidiana.

En Bolivia, desde los años finales de 1950, el gobierno quiso apretar la cultura y la tradición netamente bolivianas, a tal extremo que el Comando Departamental de Oruro publicó un informe de que había descubierto una cierta trama de golpe subversivo para el carnaval de 1963 y pidió continencia. Enfrentando a esta imposición, la Alcaldía de Oruro defendió al Carnaval, insistiendo de que era de mérito cultural y que servía para reforzar la identidad nacional.

El Carnaval de Oruro no tuvo momento de ruptura gracias al fuerte apoyo de la autoridad local.

Podemos decir que en Oruro, al amparo de la Alcaldía, podían manifestar y evolucionar las expresiones culturales en las calles de la ciudad al público, pero debo señalar que a pesar de la opresión, los bolivianos de otras ciudades no cesaron las actividades culturales tampoco, pues hasta las hacían en forma clandestina, ya que el hacer lo que el gobierno prohibía era considerado como voluntad de resistencia política.

A continuación veremos brevemente la transformación del carácter del Carnaval tomando el caso de Oruro como ejemplo.

3. La transformación del carnaval en Oruro

En Oruro, hasta alrededor de 1940, el carnaval de la calle fue ignorado por los ciudadanos. Los ciudadanos significaban la clase de lector del periódico, ya que por otro lado, había una clase social, cuya lengua materna no era español y no tenía acceso a la educación como ciudadano. En esa época, se desarrollaban dos tipos de carnaval completamente separados, según la clase social. Los ciudadanos gozaban de mascarada como la de Europa, en casas o en los salones y no les interesaba lo que hacían los de la “otra clase” en la calle.

El interés hacia el carnaval de la calle surgió alrededor del año 1940, los jóvenes ciudadanos curiosos de la cultura “extraña” y/o “exótica” ingresaron a los conjuntos de “otra clase” para aprenderla. No es difícil imaginar que haya nacido fraternidad a través de compartir la cultura “boliviana” de la calle, superando la diferencia de clases sociales ya que justo en ese momento fue que la sociedad exigía la integración de los subordinados a la Nación, lo que cumplió la Revolución Nacional del 52. Cabe señalar que la apreciación al carnaval de la calle no era capricho de juventud sino que los investigadores y periodistas de la ciudad también encontraron en él belleza y presentaron los estudios en el periódico local, los cuales difundieron conocimientos y comprensión en la sociedad orureña. En esta circunstancia comenzó la intervención de la autoridad

local en el Carnaval de Oruro, cuyo motivo era proteger el arte popular boliviano bien acogido y tomar medidas oficiales contra el uso ilegal por los extranjeros.

Entonces, ¿en vano el Comando Departamental se preocupó del movimiento subversivo en 1963? ¿O al igual que en otras ciudades, en el Carnaval de Oruro podemos observar las manifestaciones políticas?

No hay que olvidar de que en América Latina el carnaval se considera más como un acto religioso, debido a la historia de que es la religión impuesta como la “única justificada”, primero por los conquistadores y luego por el gobierno republicano. Es el período “autorizado”, incluso obligatorio, para expresar el placer, y aprovechar esa “autorización” para expresar la propia cultura, no significa rebeldía sino que es un acto obediente a la doctrina. El carnaval de la calle se extendió a la clase ciudadana por ser considerado como un acto religioso, y por eso mismo la diferencia de expresión llamó la atención.

Para los que creían, sin ninguna duda, que el español, su lengua materna, era la única lengua boliviana y que la cultura europea basada en la religión católica era la única cultura boliviana, conocer “otra” cultura “boliviana” era igual que conocer “otra” realidad de “Bolivia”. Reconocer el valor cultural manifestado en el carnaval hizo abrir otras dimensiones de examinar e interpretar los hechos sociales, y también dudar de lo que se creía, evocando diversas posibilidades de

acciones.

Por lo tanto si el carnaval contiene elementos políticos, la subversión no es el motivo sino lo que el carnaval propone, por lo menos en Oruro propuso, alternativas de reflexionar la realidad de diferentes formas, descubriendo lo que lo oficial quiso ignorar, olvidar y desvalorizar. Así que, si el carnaval tiene carácter político, es por la diversidad y la unión.

4. El Carnaval en la actualidad

En el Carnaval de Oruro se observa una variedad de danzas como la “diablada”, la “morenada”, los “caporales”, los “incas”, los “tobas”, la “llamerada”, la “kullawada”, el “phujllay”, los “doctorcitos”, los “zamponeros”, la “tarqueada”, y etc. Si preguntas al orureño cuál es la mejor danza, te dirá que no hay ni mejor ni peor, si existe es por el gusto, pues cada quien tiene su preferencia.

En el 2009, Bolivia dejó de ser “República” y adoptó el nombre de “Estado Plurinacional”, con el motivo claro de respetar las diferencias que componen Bolivia; diferentes grupos étnicos, diferentes idiomas, diferentes culturas y costumbres. Los principios de Bolivia como Estado Plurinacional podemos ver en el Carnaval de Oruro.

4 ボリビアを歩いて :

1970年代中盤のラ・パス市

写真家 高野 潤

リンド・ラ・パス

自然や村人との触れ合いを求めて歩き続けている私のアンデスの旅はボリビアからはじまった。

1973年の乾期6月、リマ市からラ・パス市へと向かう飛行機に乗った。ラ・パス市内に一人の紹介者もいなかった。スペイン語は日本で幾つかの単語を覚えていただけ、会話などまったくできなかった。だが、当時の私はまだ20代中ごろ、若かったせいもあってまったくまったく不安を抱いていなかった。

ティティカカ湖上空を過ぎると、茶黄色に染まった高原アルティプラーノが窓から望めた。そのあと、ラ・パス国際飛行場に着陸する。当時の滑走路まだ未舗装だった。

飛行場で拾ったタクシーが走り出してから間もなく、半摺鉢型に広がるラ・パス市の全景と前方にそそり立つイリマニ山が見渡せた。からりと晴れた空はどこまでも真っ青だった。その風景を目にするなり、私は「リンド、ラ・パス（きれいなラ・パス）」と何度も叫んでいた。

曲がりくねった道路を下りながら運転手が後部座席の私に、「セニョールはどこに行くのか」としきりに尋ねていた。それに応えて「ラ・パス、ラ・パス」とそのつど答えていた私は、「ラ・パスに決まっているのに、なぜ同じ質問ばかりをしているのか」と不思議に思っていた。

奇遇の縁で知り合った日本人

やがて町の中心部に近づいたころ、運転手は「日本人、アミーゴ（友達）、レストラン」という言葉を繰り返し口にしてから車を止めた。そのころ、それまで彼が「どこに行くのか」と私に訊いていたのは、「何通りか、どこのホテルか」ということだったとわかったが、私自身がまだそこまでの心配をしていなかったのである。

運転手が送り届けてくれたレストランを経営していたのが、初老に近かった清成永義さん（大分県出身、故人）だった。先に1人の紹介者もいなかったと記したが、到着した初日に、それ

以後、どれほどお世話になったか計りしれない日本人に知り合うことができたのである。私が「ラ・パス、ラ・パス」とばかり口にしてたことと、偶然乗った運転手の親切が重なりあって呼びこまれた奇遇の運でもあった。

清成さんに呼ばれて、市内滞在中はほぼ毎晩のように自宅に伺わせてもらって食事だけでなく、ウイスキー、シンガニをご馳走してもらった。ウイスキーは清成さんが買っていたものにははずれが少なかったが、私が市場で求めたりするとたびたびバンバ（偽物）をつかまされた。白ぶどうからつくったボリビアの名酒シンガニは、サン・ペドロというメーカーのものが一番香りや口あたりが良かった。

忘れられない手づくり料理

料理は奥さん（やはり大分県生まれ）手づくりのカマボコやティティカカ湖産のニジマスの刺身、豆腐のおからなどであった。

カマボコは、「チリから列車で運ばれてくるからのう」と清成さんがいていた魚を奥さん自らが加工したものであった。ニジマスは「こっちの人間はほとんど食べんからのう」といっていたように、そのころはまだニジマスを食することに関心を示しているボリビア人は少なかった。

それからしだいに、観光客用にホテルやレストランがティティカカ湖まで出かけて、買いつけをするようになってからそれらの入手が難しくなった。思い出すと羨ましい話になるが、その時代はティティカカ湖を泳いでいた50cm大の身のしまった天然ニジマスが豊富だったのである。

おからは「中国人はおいしい豆腐をつくってもおからの料理を知らなかったので、以前は日本人が豆腐を買いにいくと無料で分けてくれた。それから日本人の多くが欲しがることを知ってからお金をとるようになってのう」というものだった。

ほかに奥さんは、得意としていたチッチャローン（豚のから揚げ）やフリカッセ（豚肉料理）

をはじめとしたボリビア料理などもご馳走してくれた。どれもこれも清成さんの奥さんがつくってくれた料理は忘れられないが、一番印象に残っているのは1人で山の中で食べた長い海苔巻寿司であった。その日、イリマニ山の裏側で野営したいという私を清成さんが、奥さんをともなってジープで送ってくれた。

昼下がり、山道から入った細い道路脇に野営地を見つけた。大きな石がころがるスゲ草の密生地だった。「こんなところで寝るのかのう」という清成さんの傍らで、奥さんが「夕飯にこれでも食べなさい」と渡してくれたのが数本の長い海苔巻寿司だった。

清成さんが運転するジープを見送ったあと、音を立てて登ってきた霧がすべての視界を奪った。やがてテントを囲んで雷が炸裂しまくった。その中で日本からの輸入品だった海苔、桜でんぷ、カンピョウなどが使われた長い海苔巻を口にした。そのおいしさに胸が熱くなってくる思いがした。

大長老から注射を打ってもら

また、清成さんの紹介で、ラ・パス日本人会の常連幹部だった長老ともいえる人たちと知り合いになることができた。市内中心部にある大通りでTOKIOというコーヒー・レストランを経営されていた井門泰さん、金物屋を営業されていた塔野一三さんや山根慶久さんたちであった。ほかにも大使館に勤務されていた桜井三郎さんを紹介していただいた。

大経営者でもあった塔野さんにずいぶんお世話になったのは、私が肝炎を患った際、清成さんが「あの人は注射を打つのが好きだから、やってくれるでしょう」といって連れていってもらい、快諾していただいてからだった。

いつも笑顔を絶やさなかった塔野さんは、昼過ぎになると自宅の2階に上がって、太いガラス製注射器をお湯で消毒しながら、「調子はどうですか」といいながらやはり笑顔で待っていてくれた。

お尻への注射が終わったあと、「なんでもあ
るからゆっくりと観てくれ」といって、日本か
ら取り寄せた豊富なビデオが揃っているベッド
つきの鑑賞室に案内してくれた。そのときの観
方として、「こうすると疲れませんよ」と枕の
位置まで直してくれた。

毎日、そうして注射を打ってもらったあとに1
人で「水戸黄門」などのビデオを見ていた。そ
ういう生活を2カ月間ほど続けていたのではな
いかと思う。

ラ・パスに着いてまだ間もないころの週末、
清成さんが「娘や孫と以前私が持っていた農地
に行くけどいっしょにどうかのう」と誘ってく
れた。ラ・パスのはるか下方、緑が少ない砂山
に囲まれた石ころが多い荒涼とした河原近くの
畑だった。

日本の太平洋戦争時代、ボリビアが連合国側
に加わったことから、もしかしたらあるかもしれ
なかつた現地人の襲撃を危惧して避難生活を
送っていたのである。ほかのボリビア人家族の
持ちものになっていたが、そのとき住んでいた
というアドベ造りの家がほぼ原形のまままだ
残っていた。

同じ時代、塔野さんはアメリカに送られて何
年かの収容所生活を過ごした。終戦後、アメリ
カ側から、ボリビアでも日本でも帰るところは
自由に選択していいと言われたらしいが、「ボ
リビアにしか帰るところがなかったから、また
ボリビアに来たけどのう」といっていた。

それぞれの人が日本の戦争による影響を受け
て遠いボリビアで辛酸を味わっていた。だが、
そういう話をいつも笑顔で語ってくれたのが
ラ・パス市の長老といわれる人たちだった。

2010年を過ぎてから2回ラ・パスに向かった。
そのとき、かならず足を向けていたのが山側
にある墓地であった。そこで清成さん夫婦のお墓、
その近くにある長老だった人たちのお墓にお礼
のお参りするためだった。

日本製品とアキラ・クロサワやトシロー・ミフ ネ

1973年ごろのラ・パス市内には、市内の電話
施設改築で派遣されていたグループを例外とす
れば、まだ日本の大企業や商社の社員、JICAの
海外青年協力隊員や専門家もいなかった（そも
そもJICAという組織がまだなかった）。それ
でも日本製品はたくさん出まわっていて、河合辰
夫さんという方が経営されていた現地商社トヨ
タ・ボリビアーナが全盛期だったこともあって、
トヨタ製のトラックやジープ、箱型の名車ラン
ドクルザーが多く見られた。

私が山村に向かうときに乗った貨客両用のト
ラックも、現地の人がトヨタトといていた
トヨタ製が多かったが、目についたジープのほ
とんどがトヨタ製だったと聞いていいかもしれ
なかつた。

ほかにも頭文字のHを発音しないボリビア人
がイノといていた日野自動車や、いすゞ、日
産のトラックが見られた。小松の重機も出回り
はじめていた。また、イタチといていた日立、
ナショナル、ソニー、東芝などの電気製品が出
まわっていた。

また、市内の人の誰もが知っている日本人と
してかならず名前を挙げていたのが、アキラ・
クロサワとトシロー・ミフネだった。娯楽とし
て誰もが映画が観ていた時代で、三船敏郎、チ
ャールス・ブロンソン、アラン・ドロンの出演
していた「レッド・サン」を私はラ・パス市内
の映画館で観た記憶がある。

次第に香港映画に人気が集まりはじめていた。
そのせいもあって、当時のボリビア人の多くが、
東洋人の顔をした者の誰もが映画のように飛び
跳ねたり、蹴りを入れたり、両目を指で突っつ
いたりする技ができると信じていた。

ここまで記したのは1973～1978年ごろのラ・
パス市に関する話である。この時代、私が向か
っていたのはラ・パス県の北方山岳地やウユニ
塩湖であった。それらの旅を通して見たボリビ

アについては、次の機会に紹介できたらと思っている。

高野潤

1973年から自然や人の生活、インカの遺跡などを求めて毎年ペルーやボリビアをはじめとしたアンデスやアマゾン地方に通い続けている。主な著書に『インカ帝国―大街道をいく』、『マチュピチュ―天空の聖殿』（以上、中公新書カラー版）、『インカを歩く』（岩波新書カラー版）、『大地と人を撮る』（岩波ジュニア新書）、『驚きのアマゾン』（平凡社新書）などがある。4月末に『新大陸が生んだ食物』（中公新書カラー版）が刊行される。

5 日本語教室奮戦記： ボリビア、コチャパンバにて

日本語教師、作文・エッセイ講師
ノンフィクションライター 佐藤 葉

日本語で日本語を教えるということ

「わたしは さとう です」

日本語の授業の、2回目である。自分の胸をたたき、何度も「わたし」と言う。つぎに先生の絵を見せ、私自身を指して「私は先生です」と言い、「わたしは～です」という文の形＝文型を教える。「～」に入るのは、名前、職業だけでなく、「の」を入れると、「(大学名や会社名)の学生です」となる。

初めての授業が始まる。先生は、訳の分からない言葉を発している。先生がどのような仕草をするか、その仕草は何を意味しているのか、生徒の頭の中は自分の日常や言語と照らし合わせて意味を解しようと忙しく働き、体は緊張で硬くなっている。

生徒に自分の似顔絵を描かせ、できるだけ習った語彙を言いながら、お互いに自己紹介し合った。この1回の授業で生徒は自己紹介ができるようになり、嬉しそうな顔をして帰った。教えるとき私は俳優のつもりになって、大げさにジェスチャーをする。恥ずかしいなんぞと言っていない。

私の教授法は、直説法コミュニケーション・アプローチという。直説法とは、日本語で日本語を教える方法である。外国で言語を習ったことのある人は、現地の言葉だけで習った経験がおありではないだろうか。

私は、夫のアメリカ駐在に伴いアメリカで英語を勉強した。初めの半年から1年は言葉が出てこず、夢でうなされ、はっと目が覚めたことがある。だが、頭から英語浸けになると、英語の音や抑揚などに対して耳が慣れることや、時間はかかるが表現を肌で感じ取れるようになることなどを経験した。

私自身が苦勞したからこそ、生徒の気持ちが分かるつもりだ。いつまで分からないのだろうか、話せないのだろうかと不安になるほど伸びないが、ある日ふっと、ずっと、体の中にその表現が入ってくる。すると、それまで分からなかったことが、理屈ではなく分かるのである。分かると、口からその表現もそれまで習ってきた言葉も出てくるようになる。それからまた伸びない日々が続く。言語習得には段階があると思う。だが「分かる」経験をすると、分からない日々には耐えられるようになる。不思議なことだ。

表現とは、「文化」である。つまり、現地の人々の考え方や習慣などが、言葉や表現に表れる。だから、その表現が「分かった!」ときは、それこそ目から鱗が落ち、そんな目ウロコを楽しみに待つようになる。何十年か経て疲れが見え始めた脳細胞が動き出す嬉しさ、かもしれない。

言葉は、休まず少しずつ学んでいけば、やがて体の中に堪ってくる。自分の内にはない言葉や表現は、使えない。これは、私が日本でエッセイを教えていたとき、生徒たちによく言った言葉である。良い表現を体にとめるためにはさまざまな本を読むことが良い方法だと思うが、初級の日本語学習者には本を読むのは辛い。代わりに日本語をたくさん聞いてほしいのだが、日本人が少ない外国で日本語を聞く機会は、授業のときしかない。だから、日本語教師はとことん日本語を話さなければ

ならないと思っている。

一方、教師にとって媒介語（生徒の理解の助けになる言語、母国語・第1言語など）を使わず、日本語だけで教えるのは大変なエネルギーが必要だ。理解させるための絵を準備し、その文型を使う場面や、それを表すジェスチャーを考えるなど、あの手この手で、ときには日本人なのになんと日本語との闘いになる。結果、どうしようもないときは、なげなしのスペイン語の単語をはたいた。ちくりと、直説法の教師としては胸が痛むが、生徒の理解のためには媒介語も必要だ。

「私はスペイン語がわかりません」と、初めに生徒に言ったが、慣れるにつれ生徒は私のスペイン語を直してくれるようになった。1年経つと、スペイン語では何というか、双方が教えあっている。うっかりすると何の授業なのか分からなくなりそうだが、相互交流の授業だと開き直った。ときに、途中から英語での異文化理解講座になることもある。

「～しています」という文型の中の、「状態」を教えたときのことだ。「私は結婚しています」「私は30年結婚しています」と重ねる。「Oh! You are brave!」と生徒。「I think so」思わず私。彼女は、エンジョイしている独身生活を披露した。クラス内には、女性どうしの共感が広がった。こんな生徒のおしゃべりで、他の生徒たちはリラックスし、それぞれが自分のことを話すようになっていく。生徒どうしが相互に作用し合うと、そのクラスならではの雰囲気生まれる。始め緊張、やがて楽しきクラスかな、である。

次に、コミュニケーション・アプローチとはコミュニケーション能力を養うための教授法で、日常生活に即した例文を多用し、生徒が話す授業を中心とする。

教科書には、文法事項のあと問題が数ページある。教科書どおり進めれば先生としては楽だが、生徒の会話力や文法事項の実際の運用は、つい忘れがちになる。だから、教科書の内容を嚼み下して生徒が理解しやすいような例や場面設定を教師

は四六時中考えているわけで、いつも頭の中は日本語だらけである。

1年半ボリビアで暮らしたが、そしてボリビアの前に3ヵ月間パラグアイで日本語を教えたが、私は一向にスペイン語が覚えられないのであった。

楽しからずや脱線授業

私の授業は、ときどき脱線する。採り上げる言葉や表現が持っている日本人の考え方や習慣を知れば、日本語にも日本にも興味は増すだろうと思いき、その日の生徒の興味に応じて話す。ほとんど即興だから、何が飛び出すか分からない。

漢字の授業のときのことだ。「好きという字は、なぜ女と子どもですか?」と生徒。「昔、中国人が漢字を作りました。男の人が作りました。男の人は、女と子どもが好きでしょう?」と答えたが、これはアヤシイ。生徒もみな、分かったような分からぬような……腑に落ちない顔をしていた。さらに、女を書く漢字の紹介をする。嫁、姑は、関係を図にしながら説明。このような言葉は、日本の女性問題と関係がある。日本の女性の立場について、日本の歴史と女性史、アメリカからのウーマンリブの影響などを、少しばかり話した。意外にも、生徒たちは興味を持って聞いてくれた。

ついでに、左手と右手を向き合わせて交互にぱくぱくさせた。「女の人が3人います」と言ったところで、すかさず「うるさい!」と男子生徒。「あはは……」。私は笑ってしまった。どこの国でも、女性3人のおしゃべりはうるさいと思われるらしい。「姦しい」という字を書いたら、生徒はせつせとノートに書く。「あ、書かなくてもいいです」と私。「いいです、いいです」と生徒。熱心であった。

次の漢字の授業では、「安いという字は、なぜ女ですか?」という質問。「そうですねえ。私も好きではありません。でも、安いは、安心、の字ですね」。生徒は、「安い」の意味が分かっている。分かっている、私をからかっているのである。

難しかった質問は、「日本では外国人を外人と言って差別すると聞いたが、なぜか」「日本人はなぜそんなに働くのか、家庭や自分の人生が大事で

はないのか」などだった。私の答えは、もっと難しかっただろう。1980年代末からの日本のバブル経済と、一方の南米のハイパーインフレによる日本への出稼ぎブーム、そして日本人にとっての外国人との「遭遇」、出稼ぎの人々と日本の習慣との違いにより起こった問題などを、ごく簡単に説明。

生徒はあくび一つなく、じつに真剣に私の話を聞いてくれた。そして、日本へ留学し、日本で仕事をしたいと願ひながら、差別されることを不安に感じていた生徒はうつむいてじつと考えていたが、留学する、と顔を上げ、私の顔をまっすぐに見て言ってくれた。嬉しい。これが日本語教師の仕事の魅力なのだ、と改めて感じたのである。

曲がりなりにも日本語学校を目指すからには、進級判断のため、それに現クラス留め置きが生徒が納得するために客観的な数値が必要だろうと考え、テストを行った。だが、じつは私はテストするのもされるのも、嫌いだ。

アメリカでの英語学習にはテストはなく、学校へ通うことが毎日楽しみだった。この国際化の時代、英語は必須なのに対し、ビジネスにどれだけ役に立つかわからない日本語を学びに毎週来るだけでも感動する。

それに、3ヵ月教えれば生徒の力はおおよそ分かると思っていたが、豈図らんや、惨敗だった。100点満点で一桁の生徒、10点台の生徒たち。私は愕然とした。これほど覚えていなかったとは……。だが生徒は楽しそうだった。修了式するときには一緒に写真を撮ろうと、次々にやって来てくれた。クラスで知り合い、友だちになった人たちと会うことが第一義で、日本語を覚えることは二の次、楽しく通うことが大切だったようだ。

ということは、日本語を覚えることはともかく、楽しいクラス作りができたのかもしれない、生徒たちの仲間作りができたのかもしれないということが、思いがけない私へのプレゼントだった。そして、通ってくれる生徒たちがいるからこそ、私は1年半、頑張ることができたのだと思う。

運営者と教師は1にも2にも話し合うこと

コチャバンバでの日本語教室「ひのき」が始まったのは、2013年6月である。私は、かねてから外国で日本語を教えたいと思っていた。そして、会員登録している（社）日本ボリビア協会に問い合わせたところ、コチャバンバの日系人たちが日系人会を作り、日本語教室も始めたいという話を聞いたのである。これは是非に、とお願いした次第である。

初めの1学期、5ヵ月の生徒は、41人。7歳から80歳までと幅広く、気軽にちょっと日本語を習ってみたいという生徒から真剣に日本留学を考えている生徒まで、動機も様々である。カルチャースクールのような楽しいクラス、真剣なクラス、それぞれ私自身楽しんだが、さて、授業となると両者混成クラスは運営が難しい。進度や意欲、目的も違うからだ。

さらに難しくなるのが、留年・進級した生徒のクラス+新入生の、複式授業である。新入生は、全く日本語が分からないから、教師の指示はおろか、文字も読めない、文法も分からない。初心者には、つききりで教えなければならないのだ。一方、留年生や進級生に対しては手薄になる。来るのが嫌にならないよう絶えず注意を払い、生徒が自分で勉強できる工夫が必要だ。こんな複式授業の1時間半が終わると、へとへとであった。

2学期目は14歳以上に限定し、登録者は39人だった。小学生と中学生以上とでは、教科書も教え方も異なるため、私1人では対応しきれないからである。

3学期目の登録者は、26人。宣伝不足や社会人が仕事の都合で通学できなくなったこと、大学生が大学の時間割と日本語クラスが重なったことなどが、生徒減少の理由に挙げられる。進級した生徒の時間割設定はとても難しかった。

経済的な運営面からも、生徒が減れば教室は立ちゆかなくなる。教室の賃貸料、教材費、教師の給料、教師が借りている家の光熱費など、支出は多い。日本語学級の登録料は新規のときのみ50bs、授業料が毎月200bsで、経営のためには30人は

生徒が必要である。

私は運営にはタッチしなかったが、欠席が続く生徒に連絡したり、理由を聞いたり、来られやすいよう考えてあげたりと、生徒一人一人への対応が私の役割の一つであり、生徒がやめたときなど、残念でとてもがっかりした。と同時に経営面も頭をかすめ、プレッシャーとなった。

生徒募集や教室の宣伝を始め、運営はボリビア人の役割であり、責任である。日本から派遣された教師は現地の経営方法は分からないし、そもそも私塾を経営しに行くのではない。よりよい経営・運営をするためには、生徒のために、日本語教室のためにどうしたらいいか、運営者と教師が案や知恵を出し合うことが必要で、1にも2にも話し合いだ。話し合うとは、相手の意見を考えること、1歩進むことができる意見を述べ合い、さらにもっと1歩進むことだと思う。

最後に

日本の大学で、留学生に作文指導をしたことがある。ある生徒はこう書いた。「秋も深まった頃、紅葉狩りに出かけた。静かな湖、目を上げると一面、真っ赤な木の葉。目が火事になりそうだった」。目が火事になりそうとは変かもしれないが、その情景がありありと浮かぶではないか。むしろ日本人対象のエッセイ教室で、「(紅葉)に魅了された」などという型にはまった表現があった。定型の文章を鵜呑みにしないことや、その人なりの表現を考えてもらうために、ずいぶん苦勞したことがある。

外国人に教えることは、さまざまな違いの発見であり、私自身が学ぶことも多い。「発見」があり、学ぶ生活は楽しいもので、おそらく日本語学習者も同じ気持ちだと思う。

6 日本での研究と日常生活について

山形大学大学院理工学研究科
ものづくり技術経営学修士課程2年
池田アレックス潤平

2013年の秋に来日し、早一年半が過ぎようとし

ている。日本に上陸した際、周りに見知らぬ日本人しかいないことに不思議な感覚を覚え、驚きをかかずにいた。時間通りに発着する電車やバスは神経質な自分には非常に感動的であった。ボリビアと比べ物にならないくらい生活ツールが充実しており便利なおかげで、日本語でのトラブルもなかったことから、ホームシックになることもなく短期間で日本での生活に適応できたと思う。日本に来たことで自分の中での世界観が広がったからか、ボリビアにとてつもない可能性を感じている。その傍ら、ここでの生活に慣れるにつれてボリビアに帰りたいという気持ちがだんだんと薄れていくことに切なさを感じることもある。ボリビアで達成しなければならないことがあるのだと自分に言い聞かせ、ボリビアへの思いを強く持つことを日々心がけている。

日本に来てからは、自国やサンファン日本人移住地のことを少しでも知ってもらうため、積極的に中学や高校に出向いては移住の歴史を語り、出会った人々に日系人の存在をアピールしている。移住者の努力や苦勞を語り継ぐことしかできない自分に無力感を感じることもあるが日本人の反応観察することがいつしか楽しみにもなっている。



写真2 山形大学入学式(工学部正門前)

また、日本で他国の日系人とも出会うことが度々あるが、それぞれの国で日系人に対する意識や自覚が異なっていることが非常に興味深く思えた。一方で日系人として目指しているものがほとんど共通していたことには喜びを感じた。

留学というメリットを利用して、できるだけ色々な場所に旅行をするよう心がけている。特に家族や親戚を訪問することで祖父母のルーツを辿ることが自分の留学期間中の課題でもある。以前、福島にいる親戚を訪問した際、祖母やその家族がどのような思いで移住を決断したのかを聞いたときには非常に切なくなり涙が出てきた。ボリビアではなかなか本人からそのような話を聞くことがなかったこともあり、非常に良い機会であった。祖母が住んでいた町を歩くと、どこか懐かしい感じがして不思議な気持ちになり、まるで以前から知っていたかのように様々な思いがこみ上げてきた。

勉学に関しては、山形大学大学院でものづくり技術経営学を学んでおり、ボリビアや日本の農業協同組合に関する研究を行っている。近年日本の農協は様々な問題に直面しており、改革の時期でもある。これらを比較分析することによってサンファン移住地の農協の現状を把握し、今後どのように成長していけば良いのかを考えることは、農協を中心とした移住地の発展を促すためにも必要なのではないかと思い、この研究を進めている。

残り少ない留学期間でどれだけ有意義な時間を過ごせるかを日々考えているが、まだまだやりたいことが多く、できる限り達成してボリビアに帰りたいと思っている。

(ボリビア国サンファン移住地出身)



写真 1. 小学生にボリビアの紹介をしている様子

新入会員 (平成 26 年度)

個人会員：中部全人氏 平井克政氏、山下洋平氏
上野山英里氏、小畑和彦氏、海沼正利氏
ヤング里美氏、仁田原幸氏、川浪ときわ氏

退会会員

(個人会員) 桑田正邦氏、畑幸輝氏

物故者

白石健次氏 (元日本ボリビア協会理事)

2015 年 1 月 22 日ご逝去

ボリビア関係刊行物の頒布幹旋

- ① 「ボリビアに生きる」日本人移住 100 周年誌 2000 年 3 月刊行 2500 円 (送料込)
- ② 「ラパス日本人会 90 年の記録 1922—2012」2012 年 10 月刊行 2500 円 (送料込)
- ③ 「Los japoneses en Bolivia」
100 años de historia de la inmigración japonesa en Bolivia
2013 年 10 月刊行 2500 円 (送料込)

③は①を原典とするスペイン語版で①の刊行後 13 年間の内容を付け加えています。

※注文先：当協会まで住所氏名、電話番号、注文冊数など明記の上、ご連絡ください。

E-Mail : admin@nipponbolivia.org

事務局 : Tel/Fax : 042-673-3133

振込先：ゆうちょ銀行・記号 10060 番号 78529321
・三菱東京 UFJ 銀行・名古屋営業部・普通預金
番号 0260675 いずれも名義人 杉浦 篤

振込みが確認され次第、送付させていただきます。

会員の皆さんへのお願い

この Cantuta を会員の皆さんや、その関係者の出来るだけ多くの方々に、眼を通し楽しんで頂きたいと考えています。何かアイデア・アドバイスありましたらご意見をお寄せ下さい。

admin@nipponbolivia へメールで、または
042-673-3133 へは 電話でお願いします。

編集後記

やっと期末に間に合いました。来年度も引き続き頑張ってくださいのようしくお願い致します。

編集委員：白川光徳 杉浦 篤 細萱恵子